唐世如裝考

冬

ヲ6
3070
4

伊6
巻4

明治三十七年九月十七日購求

可全

歴世女装考巻之四目録・前編之部

一 勝山とゝ髪の結風・高尾又死の討論
二 丸髷
三 片外とゝ結風の權輿
四 俗ふゝ椎茸たぶの始原
五 髪ふたぶとゝ名義
六 たぶさ〳〵の起立
七 ぶんさ〳〵とゝ物
八 かりゞの事
九 ぶんみのとゝ物
十 兒髷・文金とゝ島田髷の一風
十一 今の髪ゝ形状ハ古風ふかへり〳〵論

十二 かぶとむすび・櫛巻といふ髪の風
十三 貞享年中女の頭ふ飾る物十六品
十四 十八九の乙女竹馬ふのりて遊び〳〵古風
十五 婦人貞操の為ふ髪を截〳〵故事
十六 水油の古名・ぶちんかつら
十七 びんつけ油の始原
十八 ぶんつけ油れうりかたを
十九 髪ふ伽羅をとめる
廿 元結・文七元結の名義・そ孫ゆひ
廿一 御歯黒の始原

通計附録共廿七條

竹村

歴世女装考巻之四

江戸 岩瀬百樹 編撰

一 勝山とゆふ髪の結風

勝山とゆふ髪の髪今も其名ハ残り侍れど髷の状ハ當世あり古代形状ハ國を異にすべし〳〵此髪ハ二百年前兼應の間江都ふ名高かりし湯女勝山が結ひ初めたる髷也此勝山湯女風呂国禁ありてのち北廓ふ入りかの高尾と時を同じして花の名まもく閑也万治三年江戸板高屏風管物語上巻ふ北廓の茶屋に老婆遊客ふ妓ども指て名をきゝゆるふ「さて巴のゆんをめゝたるゆゝらゝのゆどたちたりれゆゝ方ハ丹前たぜんのぜうさんと京田舎ふ名高き勝山さまとゝ花〻十ゆゑ中略みどりゆゝ綾をゞゆがたりよゆひゆゝ」とあり此ゆゝ山が結風たゆりつゝ〳〵こんて万治三年ゆり廿五年のち天和三年江戸板浮世物真似寫横本巻上花の露屋吉左衛門が芝宇田川町とゆり店ゆゝ伽羅の油いひ立の詞ふ「まゝる女中のだて風ハ・兵庫・つのゝる

・あるひはまさかつ山つゝう」とあり又勝山ゞ廓ゝ在〳〵万治二年より廿四年のち天和二年
大坂西鶴作「代男」巻ゝ「たもく丹ゝ風呂屋ゝ〳〵附勝山とのゝ湯女
まぐさて情もふく形さうあり餐のあるゝ物ゝ世の人ゝかとて二流
ゝとうさでめめて北廓へ出世〳〵て不思議の口分まで物ゝはなめ〳〵
女ゝたゝ」又享保五年庄司冨勝（甚左衛門子孫）ゝ作の写本「洞房語園」（同名の板本あり是ハ別本あり）巻三「美慮
明暦の比新町山本芳順家ゝ勝山とのゝ太夫あり〳〵元ハ神田丹後殿ゝ紀伊
国風呂市郎兵衛方ゝ居〳〵風呂屋御口禁ゝあり〳〵
ゆゝ勝山も親里へかへり〳〵ゝ又芳順方へはとめたり髪ハ白き元結ゝく片曲の
だて結ひ勝山風とて今ゝまさゝゝ揚屋ハ多左衛門ゝく初ていづる家くの名さうゝも
勝山うんと両側ゝ群り居さうけゝたゝめて丸道中ゝまゝども八文字をゝみて通り〳〵
粧ひ番量物〳〵たゝ又並ゝくえ〳〵とゝ全盛ハ其比廓第一ときゝとなり手跡も女
ゝあめゝさ〳〵き紙書ゝあり勝山ゝよゝみ〳〵哥ゝ・いのせゝゝゝゝ海ゝ川のうす氷さゝてゝ

いとゝ紬ハぬまけゝ（下略）さて此勝山ハ世ゝまさゝゝなる万治高尾ゝ紅葉と二月の花を
あらそひ〳〵ハおゝ引ゝを万治三年板の管物語ゝ詳ゝあり其の肉ゝよりてゝゝ高尾
ゝ実傳を挙て船中の白又ゝ死たりとのゝ妄説を折衷
按ゝ明暦三年の大火ゝ元葭原類焼〳〵地を千足ゝ許され草葺を禁ゝ万治
二年の春新廓全く成就ゝ〳〵青樓鱗次として軒を並ぶ此時ゝ當りて三浦屋ゝ二
代目の高尾あり是を万治高尾とて高尾十一代中の名妓ゝ其出生ハ下野国塩
原の庄中塩釜村（同名十三村あり）農夫長助ゝ女ゝ高尾十一代のうちゝ独り此高尾
のみ世ゝ推称せらるゝハ一貴顕の事ゝ出・巷傳ゝ曰高尾或貴顕ゝ寵せらるゝ
身を賄れなゝとも節を情人ゝ守りて随ゝ終ゝハ船中の白及ゝ死せりと
いゝ因是一犬虚ゝ吼て萬犬実を伝へ妄説ゝあり然ゝも農口金を
鑠を以て具眼の徒も雷同して実跡とゝ既ゝ享和二年加の塩原の里人高尾ゝ
出生の地とゝ其所ゝ建なる鴻儒某の碑文ゝ「遂遇害於三又水」と妄説を

碑の殘して千古に傳ふるに至る是高尾の實傳の書るゝゆゑ巻端によくれ
なるべし亡兄醒齊翁常巻傳の妄説折衷せやとて高尾考の企あし
ゆゑ彼が事のくゝなる物数本参考せらるゝど皆率強傳會の説のみにて取べ
き事さらに無し秘紀のるゐもける支えん伝或書に深草の元政上人俗たりし時高尾
が情人なりしが船中の又死をきゝて出家なりとあるは上人が身延紀行をあらぐるは
倫なり上人は慶安元年廿六の出家の時高尾八歳也如然らば農夫長助が家
にありつゝん上人は明暦元年三十三歳にて深草端光寺の再組となり三ヒ寛文
八年四十六にて寂し玉へり高尾が事の傳會はみな世にあるゆゑ心ある人の書ゝぐめ
きは一ッもなし世に比べ碑の孟浪を折衷せべき高尾が實傳を得さるゆゑ未感の
高尾考（高尾十一代の実傳）むらく箱よりあり出るふ天保十三年仲秋敝書一本を得さら
高屏風管物語と題し全三巻万治三年江戸板序文なり作者は頗る学もの
て明暦の旧廓万治の新廓にも遊び友なる人は高尾が情人にて作者もよくある人

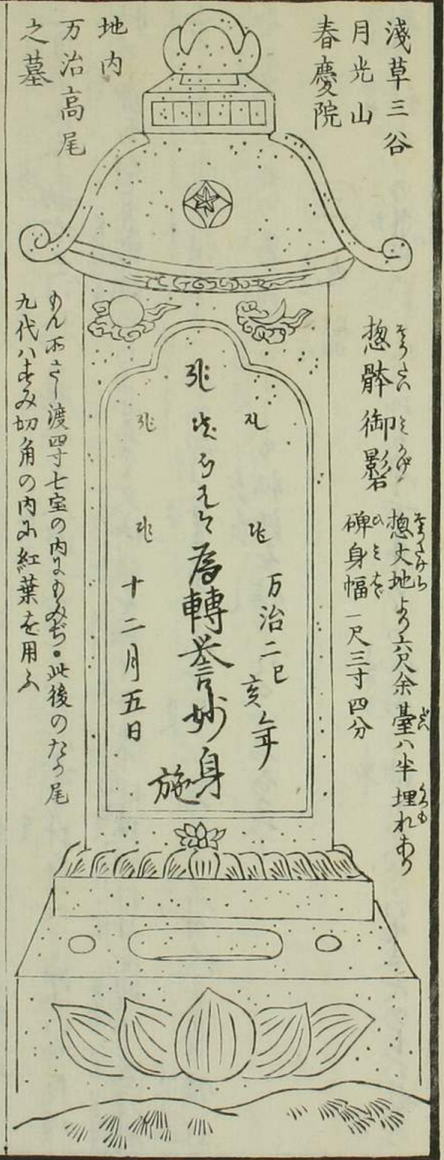
げなる変文中にみえたる一部まこて當時の娼妓の変のみにて扱搦雑紀にみ
たる一部の発端に「書物て硯の海のにに竹万治三年の春のたゝめより世ろ
くとのべ出るる」とあて全部の終りに曰「はりひあるに人せゝるて新の目
もあはねまゝに硯に對ひて心はうゝゆくまゝの事ども世ところとなく筆付
に出でゝ書にまつる雲情あるるる・中はみなそうどあれども高屏風の折
に付たこと書きれ」と筆をとゝめたるゆゑ書者の心も炳然なり・さて下九奏の世
作者の友なる秋の庵とゝ人（桜井世若は本名の高尾のかるひ名なるべし）高尾病死のことを
「たりもの紅葉ちりそうして秋の庵がくれんもこ世かくれ世なりた
死ぬこと秋と世のゆるまてに世にの事人びるさんや高徳寺（三谷浄土寺）とのゆゑうどでうに折て
これば番をなき花をさてばきうやしてとむらひをあるんいと哀れまてつ
一番のことに残ばりて加の仏前に香奠よりるるかりでんるゝける其ことをみ曰」とありて妄
き文あり末にいろ「あゝ万治二年のちは秋の末つゝより紅葉のちも東に

いるるうまれまいるぶーてぶうろうせーまみいるぶまちう彩をれば業はまりて
あうくぶもいさう寿ーとるもあるむ日みまーようてもくぶみついみあるをも
のたどめれ五日みゆかーー十九とるやみてあるあう五のかうちびみきの袋まい
三谷高徳寺　死　屈
生てあさむぶ角の拾とくるゆさめ今あうてあて・てんよめうまんとるへ万治二年
極月十一日、高尾　轉誉妙身
已亥極月十一日花将敬白」とあり七の待夜あり　此文の委実なるを証拠とーて
三又は船中み害せうもーまるへ古来の妄説を折衷べー・さて又かの三谷の高
徳寺ゆ埴一重隔る月光山春慶院　浄土宗　門内ぶうぶ左のさみあり　み今限みたうちぶ墓あり
みうげ角の四方塔のそ遊女ぶうぶ身あいふさうーうぬ墓あるもいぶーく且又三浦
屋ぶ菩提所ぶ擂寺あるみたうをまるみかくーたるもいみーれば醒齋京傳高尾
考は企ありし頃今より四十余年前あり春慶院の檀家ある旧林有浅草田町ぬい　み案内させ
醒翁地のまを伴ひく春慶院ゆいう布施をじてかの墓の由縁を尋ける
住職いひけるゆうむーー此寺ゆ常念仏ありーころ寺のちくみ三浦屋の別荘

ありかのたうを病あうて保養の為別荘みあうて　今も三浦長屋とそ　病おのくありし比いぶ
身のもい朝ゆゆ枕ゆあうみかう移のねの寺へかくーー玉それの遺言みうりてうみ
葬りたるよーー寺境み傳へいうくを墓所地四方大両の時いぶくき墓ゆ水のこゆるをど
残りもーさびいいぶ代よいうて墓所地四方大両の時いぶくき墓ゆ水のこゆるをど
今ゆ　持ーー物をも寺みありしとまーーぶ今ゆ一ッも
今ゆ　檀壇家へも合せ墓をもちのゆ玉を入をける附たうをぶのもちのみたるみ下ゆ
石棺みそありしぶかゆうみけのかうみたるいゆ寺境ゆはうゆ　ざぶと結ちち是関て
醒翁もゆかうと評論せうもーぶ捜究まき昼見もうてうち地ぶ一紙せ
得うう件の管物絡の下の巻み「いぶーせゆくとたうみちの巻やのりくうて巻をど
なくうく絡るみあるーれかぶのひけるふ・ちのぶされ見物も此春ゆ何の見所もはぎ迄
みなさゆもいぶんぶ此所のみ高尾さゆ八冬とーーうをされ・ようぶさま・こまはゆ
・うるとをぶさせゆたうゆ雨もいるみさびぬ此茶やをるもみちさまのゆ世の時ち所
せるたうでいきゆくのどぶうんゆぶーみとーーの春ゆよ後付むーみかうちきのどと

浅草三谷
月光山
春慶院

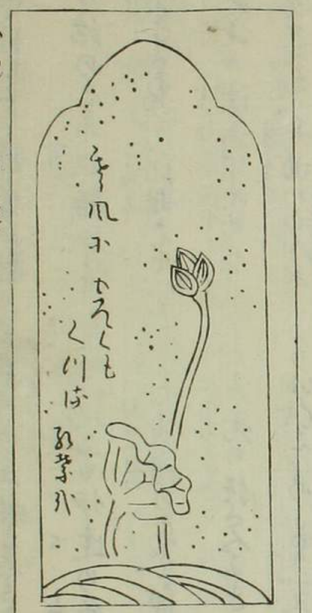
地内
万治高尾
之墓



惣髯御影

惣丈地より六尺余　墓ハ半埋れあり
碑身幅一尺三寸四分

碑面ハ三寸七宝の内より出る・此後のなり尾九代ハまみ切角の内ハ紅葉を用ふ



・碑面右の横蓮ハ二げ左りの横蓮なり

按ふ此高尾十九を一期とあられバ妓とありて物の心をわりつるハ僅ハ四五年なるべし然るハ種々の奇談あるハ皆後の人の傳會なり弱年の一女子なるハ名さ遺墨遺書を愛するハ好事の余興論をべらるゝ・此高尾ゞ塚とて別所ハ一碑あるハ没日もなのり其碑の来由ハ醒存逮稿百樹補訂の高尾考あらんか

さて髪の一風を世〻なる勝山ハ侠気あるしのとゝて異名を奴かつ山とて世よ名の高らし事諸書ハ散見ぬ梦の中ゆ称ぎまい 昨日昔 字本序ゆ元文二年秋台藤之隱士洪水とあり 巻二

「万治のころ奴勝山とて髪の一風ゆも伊達の名をえゞ扨りひの外親よ孝心あて流ぎてあり〻比母ぎて〻とゞて順禮のぎゞ伐あ〻ら〻揚屋の三階をかり切れ所ぎ

あて七月潔斉してめぐりけるとゝ古光の法ゝよきぬ今の丸曲をかつ山のゝづ〻ゝのゆゝ

ゆゞ変あり丸曲ハかん者よりゆひたゞめ〻り」又 川岡雑談 字本明和九年江戸作 上巻「北廓京町

二丁目山本勘右エ門抱ゆ勝山とのゆ遊女あり貞享以前の比なるべ〻此女いゆ丸川

竹の身あれども数鴻の名よ心ゆく又佛法を信ゞ世常迎速の浮世を観ゞ甚殊勝

なる女あり髪の結やう一流をあて世ま多く見を学びかつ山と名付く」とあり順礼

を学びく母の菩提を弔〻も仏法を信ゞ行るゆ名なるべ〻

(二) 丸髷

髪よ結ぶりの名ゆ〻しより扨より百年のち伽羅の油とのゆ拘いぞきんてのちゆ髪の

ゆひぶりよさまぐの形も名をあ〻しゞ今世よ行はるゆ・かさねぶ〻・まるまげ・おまぶ

の三様あり中ほどかさねぶ〻ハ下輩ゆ用ゆ〻島田ハ墨を染て用ゆ 他国の田舎ゆハ老女の島田なるもあり

上下老若ゆ互りていと重宝なるゆハ丸髷なり此まるまげをかつ山のゝづ〻ゝとまるゆハ

変あり きのふけり 字本江戸作序ゆ元文二年 巻二よ「今のまるわぎゆハかん者よりゆひたゞむ」と

あり 続連珠 延宝四年板俳書「丸わぎゆ渇まく彩の柳髪ト琴・藤かゝ〻て

や丸曲 柳髪可道」などあり 絵れバ丸曲も百八十余年ゆよりあゝ〻風あり中ほど

古図ゆハむくゆ〻丸髷亜ハ古 唐書五行志ゆ「元和末婦人為圓髻・推髻不設

髻飾」とゆ圓髻とゆハ丸まげとまゝゆ又 酉陽雑俎続集 巻三「坊正人名ナリ叩門五六有

丸髻婉童啓迎云」丸髻とゆハ乃丸髷なり西土画ゆもまゝえんよ

(三) 片外の権輿

髪つゆ油あゝ〻ゝ〻ゝゆハかの筋髷も兵庫もこるゆ丸髷ゆ片外も元来ハ結

髪あり世ゆく髪の油ゆぞ〻〻のち髪のゆひぶり書見あまゝあれど大ゝゆハ戯場

○勝山順禮之古圖　縮写

亡兄骨薫集梓行せゝ邑　文化十年甲戌冬

翌年ある貴人より此図の画軸を

尓して画様の説を問せ

玉ひしゝど考証勝山が

傳のみまゝ〜図ハ

うせ〜そ名けり

其のちあよ

引き

二書を

得て

此図の

さまゝ浅氷解せゝるき色めの

きのふかなのとのふハ珠書ゝるゆゑあり

おゆゑよ勝山ハ世ゑ奴とこゝれて使婦と

のみおゆひねるゑ花街よ在ゝるゝ女の

菩提の為ゑ順礼を学びたゝふいみゝき

孝女ゝりゆゑ尓ゝあそびめ図

図ゝゝとゝど孝心ゑ

めぐ其図を

うつ〜て

ちゝみ残〜ゝ

京水臨摸

寛文八年　伏見町

戊申六月吉

・人物の丈一尺ばゝり

極彩色い彩

つけハ尓ゝふ畧ち

画名ゝ〜

勝山髷之詳圖

・あゝゝハ頭のみ

全図ハ畧ち

○此図ハ天保二年辛卯の三月廿二日但馬国の人

某より画軸ゑ書を添て高尾ゝゝゝゝれど幾代目ゝゝゝ画師乃

傳ゑ尓せと云〜ハ小袖ゑもんざゝゑゝゝの紋ゑゆゑゝり

落款ゑ宝永乙酉春大和繪師里水図之とあり高尾い十代目繪

師ハゝろのゝ門人ゝりと考証を記〜ゝゝゝり

○元禄九年丙子五月江戸板

・女宝蔵一名女重宝記巻一ゑ此図ゝゝて

かさゝゝゑ妾女とゝり上の図ハ宝永

二年也寛文中の一戦妓ゑ創意の

髪の風五十余年世の人ゝて〜ゝゝ

たゝふハ是もかの島田ゑふハゝゝる女

裝中の一奇〜

あるひは淫里の風をいまゝき市婦茅ゞ推称て流行せたるゆゑ世の中に独汗外のみい
四百年に京都室町足利家の営中より起りて今はゆゝく下輩に移らぬるいのみ
おくめでたき髪の風に我もありけり・さて世の起りは足利義政公東山殿と云の北の方妙善院
殿の女中衆の変を昏る 簾中旧記 群昏類従巻四百十四武家之部 に女中衆の髪の事とい条に
「こゝや侍人をどせぬ附 按に御前へ出る部屋に付きまさこもちをどゆく附かゞ去ていろきさたを
按に むかしは平日のさげ髪なりゆゑかくのごとし 道
ゆひさるゆゑべちの紙をあてゆひ侍るなり・めるゆもあり」とあり是蓋髪を假に
片外に むすびかくをいるなり是髪かさねぐしの権輿なるべき・又元禄元年の板
女用訓蒙図彙 巻三髪の風の条 「かうがいつげは下髪せ一奉公人など世の仕あせをまひらもく
の局をこゝに入れそろゑ又は世のゞ者ぐらちよ注 自分勝手 持むづりきゆゑぐくとまそ一てかう
ゞのあそ仮よ者世をさるなり其様おりろ一そ常はゆひ振みあるるなりまゑの世まへ
下髪せねきの人柄もあへてかうがいつげをまるなりむ一い遊女も下げ髪あるるなり」

とあり按に此文かの簾中旧記を勦説あるゆゑ也ど此比及ばいまゞ簾中旧記ハ流布
あるゝるゞ古老の傳をかゝるゆゑべけまゞ是も汗外のたゞまるの一証とまべ一は是
・かうがの髷 元禄元年板・女用訓蒙図彙に刺事
図あり かうがの髷 此結風ゑたゞまろ今ゑる世の図をこれば今のかさちべ一
五十余年のむ一ゑり此頃の櫛枝ハ と事ハ同くして形容ハ異なり依
・鯨・象牙などあり 今ハ髪弟一の て世りの今のかさちべ一ハ簾中旧
かうがうとあるぬ 紀の説を本拠とまべ一

是弁あり

四 椎茸たゞの権輿

序文に明和乙酉の歳二年とありて作者の名い三橋老人とあり写本全五巻書名
を寝覚草とい八隨筆三の巻に「ある老女の物語に奉公せ一比京都より下り
女中方の髪を奏なゞて名もあり一ゑく見つきもよゝゆゑ朋輩ゑ一ゑ一ゆひける
ゞ今いづさまでもあいくゆうみゑしい名もめでたさゆゑなべ一と称りき此元女貞享
二年の生れあり是を今の俚言に椎茸たゞゑ髪の黒き紙乾る椎茸に準つん

が見立もあしく名もいやしげなりあるひはたぼのゑびとぞいひけれ」とあり又おなじ引書女用訓蒙図彙に御所風と傍註したる図右の説に符合せり

五 たぼの名義

女用訓蒙図彙に此図をのせて御所風とあり是今より凡百五十年前御所の垂髪せぬ女中の結風なるべし

本居大人が[玉勝間]八巻に曰「今の世女の髪ゆふさまにうしろと左右へはりいでたる所をつとといふをあづまにてはたぼといへり順集に・いはれぬがれ(?)をりにあかる秋なく(?)緑しくろ髪の緑くされのたぼ」とはたぼ物語の巻 藏開・ただ挿ぐさのことのみにてたぼ(?)ともなし(?)金葉集一 恋の・朝寝髪誰がたむ枕になれつけてけさはかたみにみだれてある・とまあるなどなをもあげ云るなり但しいにしへのは枕のあたりなるにつけてたぼれたるを(?)今のはまさるに作るなり今按に金葉集の津守国基の哥なり右のめぐくらく髪のなびみてたぼのつきなるなり今江戸にてはたぼといふ」以上一条の全文 此説にてたぼはたぼの陣語に

て髪に今世の法花彭脹なる古言なるべし異本[枕のさうし]似気無物の条に「しとかみなるたる人のあふひつけたる」とあり按になるゝは撓の義なり契沖法師の[河社]に「今も山里のおく山の奥にてなゝみなれたるの雲残れる洞なり」とあり和訓栞に大和に鳥こそのなゝといへりしはたぼともなゝとみてびんの撓をみなる残名清けてよぶ名也又つとゝいふはもとゞりのつとひ出る名なるべし びんの尾の道辺にては今も坂をたを下とある人いへり

六 たぼさしの起立

今より四十年ばかり以前にたぼさしといふ物はできて市婦ら始めて用ひて重宝とし近々軽便なるまゝそのゝありて今もまたおそれてはできし附は稀しと人々いひけるが其後卜世翁の随筆 寛政中の作 [賤のをだ巻 写本] をよべるたぼさしは近古ありける物なり・をだまきに「延享の頃 按に延享は寛政より五十年むかし今より凡百年まへ 女のたぼさしといふ物初てできりしで京より下りをも母をえどの召仕ふ女どもまでめづらしがりてのでたるや

○蜀山翁所藏
春画の巻物ふ
此図あり奥書左の如し依て
按ふ兵庫ハ唐輪の変凡なるべし

慶長十八年辛未年
八月中旬

○元禄元年板女用訓蒙図彙ふ此図あり

兵庫曲

本書右の如く画体なり

横兵庫

○此図ハ今
弘化四年より五十八年ふ
寛政二年家兄の作られ
なる物の本ふ家兄自画の
図を写す・天明・寛政の比北郭の
妓ふ此髪ゐき是を横兵庫とふ

島田曲

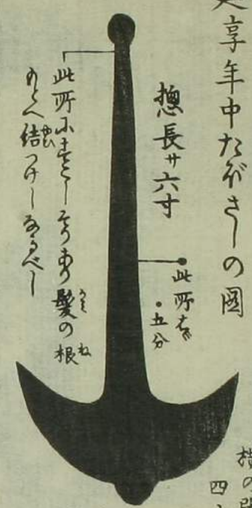
○此図ハ菱川師宣筆
天和三年江戸板の絵本ふ
あり・あげ島田なるべし
ふこれなるべんか

○享保八年京板西川
祐信絵本百人女郎ふ
此図あり吉原の
遊女
見世
付
の
さま
ゐり下ふ
あげたる図の天和四年より
三十年後ゐり此頃ふいろ
花美ふ
ゐり袖を
ゐり髪
ゐ櫛
かんざし
飾りゐもとも今ふ
ゐゐれバ飯焚の下女ふも
ゐ

○天和四年江戸板師宣絵本子の日の
松ふ三人なる北里の遊女道中の図ゐり
此頃ハ髪のかぎり更ふゐり髪をさげ
なるも見や帯のたゞ四寸だろとゐ
ゐゐをゐるあそび女さんかくの
如しゐのハかく質朴ゐりしを
ゐゐべし

しぬ鯨を作りなる物なり」とありて図を出し傍註に「此物今まれて維持する人もなし」とありてちひさく図せるなり寸法を考るまでもなく大小弁ドがさりしに一日或貴人より御ふせ給ふ品ハ着のながけなるより時代の考証なくべからずとあり

○延享年中ながさしの図



○按ふ元文延享の頃かのながけ
えりのあるまでなり出て結やう
流行なる事物ふ見えり此ながけ
ハ長サ六寸ある故以て其ながの長
かりしを知るべし

七　ぎんけし

今を去ること六十余年ハ天明より寛政ふかけて婦人の髪ハぎんけとて鯨又ハべらえるどふて綿のつるのやうなる物を作り是ふ髪の毛をかけ巾をぎんを張り中へ結へ風ふまりし事今六十以上の人の知る所なり大坂の俳諧師伊原西鶴が貞享の比の遺稿を元禄八年ふ板行したる

俗つれづれ　巻四

ふ振袖の女を名づけ髪の風着服豆袋なる物ふ入るまで一ふ系を引て細ふ傍註したる中ふ前髪のあり系を引て「きまえ髪ぐちのふ毛のまぐりなる扇ふ入く髪のうどろぬやうふ」とあり

野群談　享保二年大坂自筆其頃合作

巻三「当世の女」ハ厨・糸つむぎ・ろ竹・弁当・紙のかんぎ・水牛の髪あげ・針鎌入りのたて弥元結」とあり享保のころもつてあげたるものふ物まりしたうふ毛ぎんけの萌あり・きて・ぎんつけ油ちどまりしたうのちぶ草子どりふある

延享元禄ふ江戸ふ菱川師宣ガ絵本宝永より元文

西川祐信ガ絵本　江戸長谷川町ふ住ス

婦女の図ふ・ぎんを張りたるハちりふあり近き明和安永ふ出て

鈴木春信ガ絵本多ふ見ゆ

ぎんえんぎる安永八年の系板ふ

当世かり雛形　全一冊

そ婦人の半身を表ぜる種々の髪の風を図して一く髷と髪ちの名をきりしたる図二十二種ある中ふぎんけ残ハ是たる図二ツあり因て知る今ハ天明ふいろてふぎんけ・きて髪を張り髪の風系ハ流行ぎガ江戸の市婦ふうちり寛政享和の比及まで婦ちてぎんけ・ぎるハ十ぎりしハ四十年おの

文化のころ髪結ひて髪をちいさくふくらめ中をおとしてさげと唱へく京
ありしなり 京に安永の末に 此一風ありき 市婦人 えらび今に世上翕然として此風あり
復古しともいふべし 今の乙女たちに是なるさま 孫しきんとて髪の間に
あるのもの 俗にかざりあり 今もなほあり 西土の上古にも髪を張出しゆへ風ありしとぞ
○安永八年京板
・當世かみの雛形と
いふ書に此図あり
是髪の結風
今是なる結風
あり上に
題して口
ひらくくり
びんは
そぐさげと
むやうご

全図を畧して出す
天明七年江戸板
勝川春章筆繪本千代の友に
此図あり是も髪を後倉にゆひ
髪あり・天明寛政のころ びんは
入れぎる女あり

事物紀原 巻三に曰「馮鑑後事云晉永嘉中以髮為步搖之狀名曰鬢以
為禮容即今纏髮特髻乃其遺象」とあり然るに西土にもびんを張
てゆへ風ありしあり

八 かみかざりの事

かみかざりの本名はかつらといふ和名抄に源氏未摘花の巻に九尺のかつら又挽の
草子に七尺のかつらに赤毛のかつらとあり なるとのしもみるかみかざりをかみかざりとい
ふ湯巻をゆかざり 内方をうちかざり みどり庁名をとりて長平東山殿北の女言あり文字に
髮と冠く 和名抄に「髮和名加都良 釈名に云髮少者所以被助其髮也」と
あるに千年以上よりあり 物也又別に髮とのつら神代に男女共に附の物なり
髮に飾て飾とし又に絲まきにもあり 玉を付たるかつらに事日本紀古事
紀方業の一哥にも見へたり 妻こくハ本居大人が 古事紀傳 巻六 黒御髮の解に
たり又かつらを中 昔ハをびかつらともいふ 源氏初音の巻 花ちる里の上を 白髮

おどもいとくちるもまぶみけり・やすらえ孫どえびかつら」てぞ侍くうひ
まうべえ」とある此註ハ伊弉諾尊黒御髪の事ハ[illegible]
又中昔ハ時の生花をゑがつくぬた男の冠ハかけ〜事もありて哥などもえんたり
・かつらハ西土あそもいと古〜 詩經 鄘風君子偕老篇ハ「賢髪如雲不屑髢」又
左傳 魯哀公十七年ハ衛の莊公城上より己氏が妻の髪の美なるを見く
便髪て呂姜 哀公夫人 の髪と為とのハ事こえうう杜註ハ髪髢ハ和漢
古くあり〜 [illegible] 三礼図ハ髪の事くわしく

九 びんみのを髪ハ入る事

和名抄 容飾の具部ハ「釈名云假髪和名須恵以此假髪上」とある八今
ハ髪蓑ハ此假髪とハ物異ハものとまくらもあり和名抄ハ引る漢の
劉熙が釈名の外否見多れどさのみハひくもうるさ〜同書假髪の次ハ蔽髪と
出て「釈名云蔽髪和名比太飛蔽髪前為飾」此まゑ・びんをもちる事

雅亮装束抄 五節の舞姫の所ハ[illegible]後世まハ[illegible]ぶくといひけるう・此ハ[illegible]
女房装束着用次第図ハ[illegible]紙あるハ[illegible]正字通ハ「假髪用鐵絲為圈編以
髪名曰彭」とあり周の世
まハ編ト云漢の世まハ簡
とひけるう正字通ハ
ひろ今も鉄絲圈を作
りたるびんみのあり和
漢千古同物あるハ妙也

○此図ハ東山殿時代の物ゑ

ビンブク髪の毛そゝりくの
如き物を三ツ作り用ふ下ゝ

本書ハ写本ゆえ
彩色の物多
着つゝ白織文
の形ちちかう
地赤もやうあや
[illegible]
全身を省略ス
・髪をバ着こゝろ
中昔の物語ども
古画ハ[illegible]見へう

十一 兒髷・丈金髷

日本書紀 崇神天皇の御巻ハ「是時厩戸皇子 聖徳太子ナリ 束髪於額而随軍
後」とある細註ハ「古俗年少児年十五六間束髪於額十七八間分為角子

今亦然之」とある此支註ハ養老四年の時あり・束髪於額下あるを・えさわ
ゝるふもと刈せてあるハ童髪を飄のかぐちふ[illegible]ひふ下げてゆふ事今も亜徳
太子の画像ハ[illegible]・角子とハ乃児髷あり右の文を証とし[illegible]児髷ハ
千百余年ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]

ゆたれどかのぐんさー流行て甚しくあるーがゆゑにされ今の市風の髪ハ復古とぞ

十二 かたち結・櫛巻

今の市婦等蛇盤なるものの状をのして髪を結びをかたどりむすびとの人其の名義ハ詳らかにせざれど西土に似る事あり

「魏宮庭に一絲蛇あり毎日甎石抗粧時此絲蛇盤髻の形を結后異之蛇の盤を效て為結巧なるを天工を奪ふ故后の髻毎日不同号て灵蛇髻と為宮人と是に擬ふ」とも十ゐ一二を得ぎ」とあり

「郷嬛記」上 採蘭雜志を引くに和解を

ゆるるとぞ灵蛇髻の名ぞふさらーかるべき○古語に一鬼街ふ走バ万戸追之

とのゑとぞ識志ある者豈一鬼ふ狂走せん。物の流行するも鬼の街を走ゲ如ー安・永の間櫛巻とのゑ髪の風流傳廣く三都に行わたりとい

「武野俗談」ゐ「宝暦中浅草寺内お福茶や今ゐ二十間みみるるやおかて名だいの女ありて髪を上ゐゐて櫛をさらーまふ巻らみく結けり是を櫛巻と世上の女ゆゑ

○櫛巻とゐ髪

此図安永七年江戸板鈴木春信画繪本貞操草ゐあり上下二冊の内櫛巻の女七人あり此図も主人と下女と櫛巻ゐ此頃京の絵本ゐる巻ゐあれバ三都ゐ見えう

・ゆたこ結び

今市中下輩の妻ゐ此風ゐ

事とぞ思ふ」とあり明和中祇徳が句ゐ・櫛巻ゐ春の柳や二首の月又柳

「梅三編」・櫛巻ハ嫁の身持のゐ初」

ゐ事を不待然るゐかさえぐーの二百年かとぐーの二百年を不期五十年来ハ

十三 貞享年中女の頭ゐ飾物十六品

貞享五年京板□□盛衰記巻三「今の女もーゐつさ変ぎを仕ゆーく身を

ゐ物の道具数くゐ肩飾ゐ上ぐゐゐ入用の物十六品ゐまゐ・襟の

油・髪付・のき接ぬ髪の油と云ん付を二ツぬかぞへ此ころ長かみ・小まろく・平髪今のさけ
・ちのび髪・かりぐし ちぬかんざしをあぐくさるを今より百五六十年あハてら
のき・櫛のまぐし・髪たてら也・紅粉・白粉・歯黒・黛・まゆまみ・ゆあり 頸巾
・留針・うきよ流ら笠世あり あくましさ人此通だろし

(十四) 十八九の乙女 竹馬ぬのりて遊び古風

近年物の流行の変速なる八世人の知達ぬ多し 女児の智恵づも
いとおそろけん 代女 貞享三年大坂板巻一ぬ 此四十年跡まで八女の子十八九までも竹馬よ
り門よ遊び男子も定て廿五ゑて元服せ一ぬかくもせそ一くかゝる世や 按
ぬ此四年跡まで貞享三年より八正保の間を指ていひつるぬ一ん見ようり今二
百年おの女の児八十八九ぬて竹馬の遊びをゑ一たる事いと愚げなり今の女児ゑ
七ツ八ツぬてまさる遊びハあるぐ如一又廿五を男の元服の定式を市風ぬ
けまで今ぬ一ゑ一ぬ十年遅以二百年おの国弊をゑ一べ一ゑ製ゑ事ぬ

あゑ絵ど物の流行遅速の弁ぬ因て考一つ又一説あり正徳年中大坂板 伊呂波居
巻二 盆踊の女児のさまをゑ人ぬ「背八人の心もこゝろなれ娘の子十八九ぬてさ人
しろこゝる事もゑく男のそそのゆうぬ育つ」正徳ぬ背といひも六十年おの正保
の間ゑ一べけまバのよく竹馬を実とゑ一べ一 此事骨董集ぬもゑ一べ

(十五) 婦人貞操の為ぬ髪を截る

夫ゑて妻髪を截ハ古今の通義ゑり又貞操義心の為ゑる事今も往く国も
ゑ一もさる事ゑり 古事談 此巻ハ謙顕卿の作ゑ一べ古昔也 字本ぬ流布せ前集巻の一
人ゑ一ゑ一ゑ一

皆切之たり此時驚問妻曰太上大臣と中人の御炊み切髪を交易てかの長髢我
仕丁してみをハ今なるかうと云り妻敢て歎愁の気なく常の如く咲ひ」本朝漢文摘要和解

とあり西土にも駢事あり

世説賢媛之部

湛氏と同居を同郡の范逵とふ人孝廉後者あまたきたりて陶侃が家に宿りけり
時に氷雪積日侃が室如懸磬なりとが衆客の食を窘けまで侃が母頭の髪を
ふて地に委ねど客ぶことを截て二つの髪髪一作髢とりて賣数斛の米にかへ柱を
斫て薪と為蔬を剉て馬草と為精食を設く徒者まで乏き所を」摘要按ずに和解明智

光秀浪居の比友来り一時光秀が妻髪を賣て酒ふ比を実跡とて
物ふ云されど忍くハ件の慥成陶侃らが事ふかりるべし」新続古今集排諧部「あ

きりける女のをとこに髪切られたりと聞てけりける大蔵の亂材母千早振
かみもあるものをいとどうだに結ぶぞ若」とあるハこれ女ごめの
男に髪切られるあくんまち今もあるめり又のみがき貞の為ませ半坐にあり輟畊
録巻九夫婦同棺の条に「軍士李青が妻春児年廿夫疾革し顧て妻に謂吾殆汝

其善事後人春児ふ髪を截て信を誓ひ再適ずを小夫死て嚙匠
人棺を大に造せ自経死ず里人大に憐夫と同棺にして葬り�following」とあり此輟畊録の
作者曰「此事至正朝戊子歳に有し事也此張春児ハ寒微く生長て礼節に閑
けれども尚夫婦の大義を知と如此世の名門巨族を顧み動衣冠を以自眩夫
の骨未寒有求匹之念萌者是等の人ハ張春児を見て少ハ夫婦の義
心を知ぬ」とのたまふ

琵琶記に蔡伯皆が妻髪を賣て親を
葬し事孝と貞とかの張春児と美名を並べし

揚貴妃外傳に楊貴妃妒媚
ばかり玄宗に寵ぜられし時玄宗の心をもりあやさんとて髪を截ていひけるゆう妾が
身にある物ハのこらず君の賜ゆり独り髪の毛のみハ父母の賜ゆえに見て奉るこそ
ばかりなれば玄宗貴妃が髪を見て心とけまもく貴妃に惑溺ふるるせり又

全唐詩話二巻に唐の世貞元年中太原との人所の妓敭陽詧と深く情人と婚を
約しけるに情人都へかる用ひけるに吾家よりくぶ相近んとて家に敢しかち更に

青信
箱に藏め女弟に贈く歐陽生いはく可以為信とも未〳〵しと一詩を作て後筆を逝
ぬとありかゝるの事唐土にはなべてしとゝへて它の昏にも此事こゝたりまさば情の為に
又髮事唐土にては千年のむかしもありし事也○扨もくぐつ油とのゝ物いでゝ
のちは髢の形種々ありて其の中に唐土にて髮見の
古國ちらし物にはとうきされば皆棄つ・髮の事はこゝに終る

(十六) 水油の古名・さゝ絲かづら

神代に燈火もまゝ油あり〳〵事明〳〵髮は油を得ざれば結る物ゆゑ神代に水油は
はじまりけんけもど物にはいとゝ人王よりこなたは中昔のことゝ和名抄容色の部に
「澤釋名曰人髮恒枯悴以此令濡澤也俗用脂緜二字和名阿布良和太」と
あり釈名とは後漢の劉熙が作ゆゑ和漢とも脂を緜に濡して付る事乃
古き代なるべし今も市中に男の髮結とゝ者盥に緜を入て水油を

かゝりて付る此千年以前にありける澤あり後世には白ひ人の水油もあり〳〵とこゝに
今物語六百余年の古書草子に「待賢門院の堀川・上西門院の兵衛・をとひろうけり夜ふく
るまで堀川をみけるに火の消えなんとしけるに紙さゝりられば世
かうだくみをひけるを堀川・やはり火をたゝれよとゝ似たりのまとゝいひさゝれば
・兵衛・てうじがらの香や白ゝうんとのみたりて知り〳〵ろうけり」とあり士清翁が和訓
栞に此事を引て「寒夜の節会をみて子の油を引て近世のいとゝは五味子藤の実の也
類聚抄にはこれを「髮の油をのべ」とあれどこゝは髮の油ををみ〳〵切て筒に水を入て利浸もけば粘汁出るを今のぎん出とゝの油を
こゝにはうの用ひるはぐん分油いとゝ八十年前までありける事其比の書にあまま
さ見へたり此五味子を一名美軟石とも又能狂言烏帽子折の髮を結る
所の詞に「此筒のうちにぐんせんがぐる」又北条五代記巻三に「髮はぐるんせんにて
なくつけあげ」などゝこれば古くはあり〳〵物とこゝに近世著聞集万治二年板
「肯髮分油の時代も男女とも美軟石のぬめりをもて髮をゆひ〳〵也」とあり

又ぜんりきものの俳昏 [二さ車] 正保三年板雜舟撰「真風さ岸の柳のあらひ髪ガ
・ぜんかくい乳母ガ歳玉」又 [塩屁] 享保の比尾張の人天野信景との博学なる翁の作写本百巻の物字本なれば春日さるるもなれとこるハ来十
み天文以前の武士の風俗をいる下ハ「又五味菖をめ人の男女盛ス愛を
かくむ是も中世より世〜幸とぞうんくる頃日ハ三州某の谷ぜんかくし
けるとぞ京師雅波東都いさゝ也所〜の都会ならび田舎の未こも毛婦人是を
用ひざるハ〜とや是も一時の妖艶とのべきみや」といくれる此作者天野信
景翁ハ行年七十三めそ享保十八年癸丑九月八日卒ら是て人ハれバ寛文元年の
生也依てなるべく百巻あるものの第十巻ハ此頃盛りハ
巻を爾る元禄の末より正徳あるの事なるべ〜此頃及ハぜん分油のつゝらあり
時なるとぜんうつゝけるとりしい古風の残もるるん [物類称呼] 巻三「さ孫のつゝ
大坂あて・ぜんさう・東国あてぜんうんのたゝ・出雲あてさゝらつゝ・伊勢辺あてく
・ゝうど・出作あて・ゝのりかゝら」とあるべ緒国あても用ひ〜とうんさう今の女中ち

ぜん分の外ハまた油ぜん出〜の重宝あるべ五味菖の名ハ百人一首ハ知る人ハ
ゝうん享保十一年不角撰 [百入染] 一名俳諧百人一首とて百人一首のもをたちいまたるの集
の中ハ・二条右□臣を「花ちいざ那帰帽子もさ孫うたゝ」是もさ孫ゝうの
ゝ有り〜一説とまべ〜此外ハ撰証あるまとど例のうるち

⑦ ぜんつゝ油の権輿

人王四十六代孝謙天皇の御世天平勝宝の年間諸樂の菩師寺の沙門景
戒ゲ作りたる [日本霊異記中巻] ハ「故京の元興寺村ま行基大徳・人ものが知シの弟子
信厳法会を備行基大徳を請ひ奉りて七日十是説法あり道俗集りて法を聞
聴衆の中ハ有一女子髪ハ猪油を塗たるが居中法を聞く大徳これをこ見て
嘖言く我甚鼻哉彼頭ハ血を蒙たる女遠く引棄よ女大ハ恥て出罷ぬ」
本朝洪文とのり按ハ往古ハ天皇の供御ハも獣肉を奉り〜事国史ゝ[illegible]れバ
下賤らの獣肉を食ふハ常なるべれば右の女も手ハちるき猪の油をなを塗ハ

つみたりゐん宮の女も又然らん是髪法多油の萠千百余年外みわり因云

古今著聞集 巻二 釈教・天平勝宝二年行基没とあり按ず行基大徳ハ泉部中ノ

州の人百済国の王の胤聖武帝の御時の人也天平七年ハ大僧正と云

是大僧正の権輿也遷化のちハ大菩薩の号を賜ふ

（十八）塗髪膏の沿革

髪ハ塗膏のえでまり膠然なる検証ハえざれども其事のえたる近古の書ども

を集て考ふるに寛永年中武家に仕へく奴と唱へ者頬髭を生ずたる上へ

かたあげ面白く剛侠を示す事ありけるハ髭の垂れさがりたる為に蝋燭の流

れるハ松脂をいたて膏ハ作りたる紙髭をつけたるぞ今のぜん外の権輿なるべき

蓋奴がたげを作る事ハ加の淀御に仕へる女の 〔お菊物語〕 字本 おそんなどハ慶長の間

よりありそる事多うさて奴がたげハ〔落穂集〕 大道寺友山翁覚文中の筆記字本 巻十 ハ寛永

の末正保の間の事を云下ハ「伽羅の油ハ前髪立の・児小姓ハ格別其外ハ上下共ハ

年若き男の髪ハ油付る事ハ多ハ寛永 按ずるに寛永ハ

其時代ハ男のみあげの 按ずるに上へ頬髭ハ槍持も有之ハ

・中間・小者類ハ有之ハ其輩蝋燭の多く紙きれ松脂を加へ伽羅の油と名

付用ひハ其節ハ伽羅の油入用ハ

伽羅の油店ハ 〔むかしく物語〕 此書ハ新見傳左エ門正朝入道法入翁行年

往事を筆記せり是一物也写本 流布せり 八十歳のとし享保十七子年九月見聞ス

去々年或人八十 翁物語と題して蔵板せり 按ずるに寛文ハ

油一生付ざる人多し付る人も ぜんの人下り又ハ江戸ハ

ハ付し也女ハ伽羅油つける事ハ

天神前ハ一ケ所神田明神ハ一ケ所 伽羅の油賣る店湯島

麹町ハ二ケ所牛込ハ笹屋と一ケ所亀屋と一ケ所 一ケ所

ぜんぜんその人ハ京都へ銚子ぜんぜんその人ハ江戸中六ケ所ハ京都ハ

ハ小さな目業貝なる入て賣る ぜんへ付る人右の目業貝などの一たへの油を

一ヶ年の分切る人もあり二年三年の分切るもあり其れを又伽羅の油分る人とて
笑ひ恥しる為に茶髪の若衆ハ多く分る古の月茶見よ一ツの油を大さ二タ
月ばかり分切る成人の子息十五六歳の若衆右の為に多見ハ一ヶ月の油を一ヶ月ハ
分切りとて取り沙汰する程也按ずるに伽羅の油分るハ恥の為ハ絹の為ハ
見事なるハ伽羅の油の庇ゆゑんと見られて笑ふ人あれば多くハ分ざるべし誓文
を立て爭ふ事あり今ハ按ずるに享保中大なる貝ハ一ツの油を二三度ハ分るゆゑ江戸中ハ
伽羅の油賣所多し女中猶以分る也」上・一条全文 ゆゑに伽羅の油ハ寛永の中比
下輩の手より起り廿年の後・明暦ハ遊女ばかりなりけり 玉海集 明暦二年
板俳書「薫ずるハ伽羅の油ゆゑ花の露」又 箕山大鏡 京人呑舟軒箕山作 自享保安室二年成り「ばん分油松
脂煉ハ髪枯てあるを蝿除を用ゆべし」又 続暦人傳 の中・松岡恕菴の傳中ハ
東涯蝋燭の流を伐奴僕ハ与ふるなり」の人ことを問ひけるハ先生日ばんつゆの為
なりと答ふ事を考ず按ハ先生ハ宝暦を盛んなる歴る人なれば京にてばん分

商ふ店もあるハ時あれど質素の家ハ其らう故くの為ばかりを私ハ製て用ひ一とせ
以国酔の古朴なりしを考るに享和ハ貞享五年板 □□盛衰記 ハ・女の頭の
上の物十六品あり其数へ中ハ・髪の油・ばん分・とのゑハ此比及ハ地女の容色を飾
るものハばん分を用ひ一とせ今のごとく婦人として貴賤の必用あるべきなり
けん 世間娘気質 正徳末京板 「むかしの女のきやらの油ハ遊女の外多くハ」又
翁草 巻五 天明六年板 「伽羅の油昔ハ茶種屋ハ南ひ男の髪をつゆ女ハ絲
うりの人物あて月ごとに梳ける為臭気ものゝ為ハ寄附しハ四五十年 按ふ元文の比也
次素男女とりハ頻りハ油を用ひ元結ハ以前ハ貴賤ハ紙縒なるを今の
風俗なるハ高ぶ油元結の店ハ次第ふ出来ぬ」又 我衣 前書字本の物 「伽羅の油
寛文年中糀町へ谷島主水ハ女形油見世を出て日本橋室町一丁目へ若衆方・中
村数馬油ハ紙出て浅草虎屋市之進ハ女ハ中ハ其頃武士ハ 按ふ寛文の比也
つけまども町人百姓ハ不用正徳ハ蛤貝ハ一両入三両入曲物ハ五両入上油一両ふ分

代二十二文極上白ぐ油一両代二十六文黒油四十文此上ハなし」とあり ちなみに髪の油
町人百姓ハ不用とあり然今の若人らハいかなるめきと寛文以上ハさら也以下にいたり
て今より百四五年以前宝永正徳あたりの板本の絵どもをみるに俗ハ其日かせぎと
いふ男のやうなるハ髪の根を紙ゆひのみなり紙縄にて髷麼を用ふ女も
しかり 妻しくハ元結の糸にゆふべし百姓ハ藁にて髪をゆひし由見えたるなど下男一匹との大磐書あるも
見えたる書面よくもらへ○ゆのさぶ茶友に業店の隠居宗香とて天保元年に行年
八十七歳の翁にて頗好事の人なりけるゆゑ
茶種屋とて伽羅の油を売りしと其人は
まろ済く人ありやと問たれば翁いはく吾家は
悴にて四代茶種屋なり吾父ハ宝永二年の
生まれにて七十七にて天明元年に没せり
吾若年の比父が語りしハ今伽羅の油

○元禄八年大坂板井原西鶴作俗つれ〴〵に草子ハ醤油・世事談に京三条宇賀縄手五十嵐とハ是なるべし今も江戸両国橋の広小路に同名の油見世あり百五十年来永続の家名のこめでたし

○元禄年中の江戸板横本諸芸写に此間来る年号ハ後の役商げにて新坂にゆくべし物とあれど元禄三年の板本記文中に見えたり・此図ハ芝宇田川町花露屋喜左エ門異名をせいし喜右との者の油のゆゑよし此者の事・世事談の物語・世事談に見えたり今も芝神明前に其名残あり是也めでたし

とて一ッの家業となりしが元来ハ我が店にて
て売る物なりとまく其ころハ武家の
中間松脂と地蝋とを度々買ひにきたれ
しゆゑなにの業にかと尋ねければ
出来て部屋のものらが鬢付
油に作るのなりといひしが其のち白油を
ねりし伽羅の油と名付茶種屋仲間に売るものありしゆゑいづこもみなもちふ
なるによりもてはやされしより其のち香具屋にて上製の油をうりそめ茶種屋の八
まうなりと父がかたりしと翁のかたりし此翁ゆゑ一両目二両目の名あり今其
名の残りしハ両替町の下村なり也と宗香かたりしハ天保元年の事なりき亡兄
醒斎翁所蔵せられし正保年中下村が店のびんつけ油の引札半紙一枚今にあり
同標も名も今にかはらずめでたき旧家ゆゑ両目の名も残りしなりん店おきにゆ～

ろく□のかんぞんあつて世のうくみをあんかつのなぞ孤なるをの世ゆくをこてむりを
まのびーが今はうんぞ 本朝世事談 享保十九年江戸板「伽羅の油は正保・慶安の頃より京室町
髭の久吉賣ぞむ其後京三条の宇賀縄を五十嵐江戸あてい芝の世もーゆかつ
う」とあり世の鋪の・物はうとる両国をうるのもの 浮世物真似諸藝尽写 世書全三冊
横本江戸板 刺繍の考は挙なる図中みあり 全部まべく時鳴ありつる物賣りのひさてあるひと
見世物あぐの口上を世のまくみ紀ーりる物あり世の中みとめづしきいふきや町あて
見せるべらぞう この見せ物ありて図あり・たてる懺よ大坂下りべらたうとありて異
体の男唐裝束をーー手ま唐團扇を持麻机よかりたるさまを多がけり容白ゆ
うげみこの周て按み世こを物のあしころ人の魯純ゆるをべらぞうとのひとるうひあ
祈結とありしとこを元禄間の草子ぞのみ見証あり近年駱駝のこせあありしは
物の長大みーて便用あうげうゆをらくだとのくされどらくだは偏で普ゆうむべらぞう
八方車みの通むるゆ百五六十年・来歴ーて今猶市街の万戸べらぞうとの人図を

いはざる日はの一人外ある畸人の名斯世俗の一結とまりて猶歳と世のちへもつさへきち
ぐーー人事の一寿事どのみべーべらぞうの図考は骨董集に編よのみべーさて右の書み
せもーー世ゆるる店の油のいひそみ「おやるせもーの義は代とのづ主様のいるいるよ
あづりきやらの油とへばせもーーと地へせらぞうる 畧是和田川町よ小家ゆれぞ
かまうみ振完をかまへ代いかそれども名顕はかるるぞ花は嘉やゆ桂はつでぞうる油は
白ひ黒ひかんがらひやるるるひあるひいこそ白ゆ孤和蝋を作るはぞ唐
蝋を多ゆひ作りゆひるるのう者かるかりたくだとるて白き梅の花中 畧さて又作り
ゆるる油みやーれ・まんてのうをつるぞ松ゆみ・るまべを入ぞ多るまるり極上で作り上け
ゆ 畧 活用とぞうるませうづるう 極上と白ひ入ぞん付五両入ぞ三匁白ひ入ぞ一匁
五分ゆるつさ一両ぞ廿四文半両ぞ十二文小貝ぞ六文」 畧とあり地のつよ今賣茶香具
るゆの商ひふいひうるるい元禄時代の餘風あるべー 新智恵海 享保九年板中の巻「白ひ伽
羅の油秘方・唐蜆八両・松脂三匁・甘菘二両・丁子七匁・白檀一両・茴香四分・肉桂三両

・青木香三分・まんてらと胡麻の油加減してよく煮ドつめきぬ袋あて漉し
かりまろのり三分合せ練る」とありまんてらは猪の油の異名なり享保のころ
白の油を法ろひとえう獣の油類ふ論ずる事神佛の物をれるうんや牛をも公禁
として板本ふのせいらるみぞやおふらしる日本灵異記ふ猪の油を髮ふつけたる女殘
行基廿廿の目よ類ふ血を蒙たる女とありて今は髮の油ふ用ひるより松
ゆめもあるときくさもわるんう○まるは油も高くあり物とうとて元禄十二年板
初音艸噺大鏡 ものの絵ばいひくるるふ「萩塵坏の巫が也紀油 文形 水木辰の女形ゲ紋
なるべ」とあり辰の文ゲ紋 是也甚物を高ひなるをいつり又 俳諧菊枕 宝永二年板 「湯
あゲるの編ふ白人ふ也油ゲ綱の魚とて ふ絲親の女」さて西土ハ太古より髮を上
ゆ國あるハ髮の油ふ上ゲ 詩經 衛風伯兮之章 「自伯之東首如飛蓬豈無膏沐誰
適為容」とふ膏とあるハ乃髮の油ふ上ゲまして後の世ふいうて白ひ水
油も害見あり・此章句を俗解ハ伯ゲ東へ旅立ゲ髮もくしけずらずゲ

ゲ膏ゲてうたゲくゆひ沐ゲどもくけまと雖を適ゲて為容さる事せゲ人月
もつろくと慎ふ婦德を拳て女子ふ教る章句あり此紵經ふ似るハ御国乃
万葉集の哥ゲ巻十の哥ふ「春ゲくハ何ゲ死ゲ山ん櫛笥ゲ玉の小櫛もさらん
とゲ」紵せゲて意ゲ近くハ正德の比井上通女 九亀堂中和漢「東海の旅
寝の文ふ世ゲ和ゲ鏡もちりゲ曇る秋の月」是ハ学者ゲ名ゲ章句ふ
ゲみん心ゲき婦人ハ緣寝の文ゲ果たくぬうゲ紵ゲてもゲ世ゲ家ふ在て為容
ハさゲ也ゲ世ゲ幸ゲ亡心の生ゲる遊楽ゲまるゲあり内ゲ女中の居ふ也油のつゲて
紵經を解ぬ光ぬまゲ子どもの末のゲうまるを傷ゲて光ゲうゲる事ゲ多ゲ敬ゲし

十九 髮ふ伽羅をためる

中昔の物語どもふ衣服ハさゲ髮ふ香を焚ふ変ゲ見ゲ多ゲ後の世ふ
ゲ光ゲも光ゲ東山殿の比の物 嫁入記 写本ふ「火取香炉ゲ光ゲ香ハゲ香ゲ
る物ゲあゲひをゲ衣服ふ香ゲ用ゲ緣なゲ香ゲ焚ゲふ用ゲ」とゲ光ゲ世ゲ

やはり遊女さん小袖や髪や伽羅をあなる事浮夜艸子ぞふあるさうんと都の風あり延宝五年江戸板 絵合後集 俳書 「おぐみの森机ゆゑ待らん 附白髪 髪乱れ 髪乱れ 白ひとあさうせて」 又享保二年京板 要入島臺 巻三 「待女郎は医者どの内方大内の お物師はあさ果てもしらまれぬ番木の花と繁まさをかるる也」 あるこの記 もこ物よこんさう・さておのよ云ん分油ありし むしろ〜い髪の結ざる爲よ法華なる 水油ゆ白ひ入りもありこんさうゆもも髪よ臭気あるべ白ひ番木もあるあるべし 遊女ゆの番木あるも百三十年あハ伽羅の價廉りなるゆゑあるん云ん分油 の極製ゆあり〜仮束髪ゆ番木あるる事書見さうゆあり衣服の番木もあ ざるハ伽羅の料なりとくありしゆゑゆゑや

廿 元結

・文七元結の名義・元結の名義

元結ハ髪ゆゑの必用の物なれバ上古よりもあり浅学ゆ見あるる歌集 ゆ元結をよみいもたるあるあきあまどゆゑあるも紙縒あるもあるべし 和名抄 容飾具部ゆ

「髻・和名毛度由比以組束髪也」とあるべ糸あるゆ元結の本義あるされども 女の元結ハむかしも飾と実用との二ツあり今も長かゆの絵元結ハ飾常ゆ用 ある文七元結ハ実用あり飾あるハ人の目ゆつきさされば 中昔の物結のあるゆ元ゆひとあるハみな飾の元結なるべ今の文七元結の考 紫式部日記 中宮御産の条ゆ 「かゆのまゆるこそ女房八人ゆ白き服 袴 髪上 白元結 盤持 連 牡きまてかみあげまるきのとゆひて白元結ん中 器宮の内侍ゆとゆのく まくあざやかあるゆうだゆゆ・ゆとゆひたんゆ元結映 髪 かりきさゆ〜てさ」とあり見ハむかしも御産より七日の内万の物結白きと用るゆゑ 髪とげ〜なる元結ハ今の文七元結のゆうある物とゆおのハるれどさうゆあらじ俗よゆで 今の丈長ゆうの物の飾り元結あるん又 枕のさうし 季吟本 巻八 むかつぶ〜ゆ・「ゆゑゆひ まる」とある 鴨注ゆ・まるん事と乳のくゆゑゆゑやとあるべむかし〜実用の元結ハ紙縒 みて自作ゆまる物あるべ〜猶ゆ和と委実あるハ 小大君集 小大君六三条院ゆはべ〜女蔵人左近也 「宮の内元と

結縷

ゆひ・よりてまつり玉ふ事ハたゆ[太夫徒]をのゑん法ゝ[太夫みてゆしなき人みゆゆのゝ]まつり[まゆ]を北のゝ

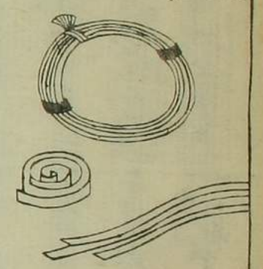
死 うせ玉へて中 畧物の中よりえらびけるを[物の中ふのゝ]ゝ玉へ[ゝ]ゝ事

語 あらくなどきこえ玉へ[ゝ]ふ[ゝ]ゝ[ゝ]ゝ紬のゝ[ゝ]みやゝ[ゝ]ゝ[ゝ]ん[ゝ]ゝ[ゝ]ゝ[ゝ]ゝ

又
上たるうたぐるのかな絵のかみのとこゝの空地に水をたゝへて池めく深草の人一人あれ
ば蓼の花穂のえのび・あるのみ笛本色つきこゝる・雨風よつみて虫の声きゝさう
大ゝるの字のうゝるふ待のかゝるむ物さる月武とをりし寒さゝの明り北ふたく
寝て夜夏ひぐらしうぐ竹の簀近ひ蛍をかぞるもちたる中略主人の男等
機車こゝ輪見来てゝる世のかをゝるゝ竹のひけり文七といふの元結ちく所ゝ
あるゝるあり俳句・文七ふ字るふ庭のかゝるもり」文ゝふ甚角かくのひをのて
文七い元禄間の髪匠の名ともゆりゝられどさゝ中村仲蔵が自筆の戯子
日紀ゝ友人柳亭種彦翁が所藏全二巻　宇都宮の戯場ゝ鳥山へいる下ゝ「此所ハ紙の名所ゝて
もり文七とゝ紙ゝたゝて見ゝたるを元結よせ下ゝ所の人ゝきけり」新ひ
ハ今ゝり七十年ゝ安永中の事ゝ又「本朝世事談」享保十九年板巻三ゝ「擬元結覚
文の比始る文七ハ紙の名ゝり」とゝ見ゝらを証ゝて文七ハ紙の名と決むべ蓋
紙ゝ名の文七宝永のゝゝ江戸ゝ出店して所ゝの空地をかりて元結作ゝりしゝ

甚角ゝ文七とゝの元結ゝ所といひしゝも古ゝ紙の名ゝる事明
・内云甚角ゝ俳ゝ芽場町今字を植木店といゝ所ゝ組練先生も此所ゝ住り
甚角ゝ句ゝ「梅ゝ香や隣ハ荻生惣右衛門」と組練ゝ俗称を梅ゝ下の句と
ゝ梅ゝ好文木の異名ゝるを以て儒者ゝ準へ香の一言ゝ称美をゝる荻生惣ゝ
賞をゝゝ梅香隔歳在隣家とゝ白楽天を襲ひたるゝ段奇ゝ妙ゝ実ゝ蕉
門の喬木誰ゝ肩を並べきゝ見べゝ遺墨も芭蕉と肩を同ゝ播磨室水四年
二月此地ゝ終る年四十九歳・隣ゝ梅ゝ十六年ゝ枯ちく　組練ゝ行年六十三享保七年没ゝ○今
のたけなゝとゝふ物近きもゝハ平元結とゝ作れを髷へむすびて元ゝ
元ゝ結とゝ飾とゝ成るゝ正保中の板・俳書「山の井」季吟翁撰「梅樫の元ゝ元結
結ゝ二月の月」と三日月ゝ成るゝ所ゝ今ゝ元結と浮世元結
とゝひけん貞享二年板大坂「代女」巻一「ゝび島田かくしむすびの浮世のゝ」と娘ゝ
さまゝゝ又同五年板□□盛衰記巻三髪のかぎりゝ月ゝをゝ所ゝ「平髪・ゝのび

正徳二年の和洋三才圖會に此圖あり今より百五六十年おの元結もなを長き今とかはらざるを見るべし是賣り物のさまなり



○此圖は友人所藏の画軸彩色絹本美人柳下に独立る圖疑識なけれど明重と髪の凡丸髷に似て且元結元結のさまもあり髪のうへのみ摸しのもの

髪」とあり此外元禄お後くきよさしぞおふ・元結・元結のとゆひ・元結元結のゆあまることえたり

○西土にも元結あり

事物紀原

に二儀実録を引て和解を燧人の時為髻但し髮を以て相纏て物を繫縛と云し女禍之女に至て羊毛を以為縄向後繫之後世は易之に絲絹を以て為頭纚と名縄之遺状也とありされど頭纚は・りとも云べれど今のつのかぶゆひの方よ近し絲絹を以てまと

いへば也・さもかくも古き物よこれなる元結とあるは組糸の物にて飾なり雅亮装束抄に紙の紐といへるぞ実用の物にて今の元結なるべき○さて髪・鏡を始めて梳よりて次第して油元結よりぬきべ頭の上の事はのしるもあれどさへあきらかなれよりて假粧の事をいとんまへ燕脂鉛粉をさしとあんなれど歯を染て女成りまるは古今の通儀女子の祝ひ事なるべ

廿一　御歯黒の起原

和名抄　容飾部

黒歯。文選註云・黒歯国在東海中其土俗以草染歯故曰黒歯。俗云波久路女今婦人有歯黒具故取之」とあるこれ今ことのはは此和名抄を作りなる延長年中の事なるべ今より九百廿余年お女は歯を染なる事明し其以前何の世よりぞはじめる事紀立けん抄物ぞはのうんぞ然べ中の色浅学なれば其源を究んとおのよまづ右・和名抄よ引たる文選の注をるべ六臣註巻五左太冲が呉都賦よ「烏滸・狼臈・夫南・西屠・儋耳黒歯之

酉」とあるを刈注に「夫南特有巧才、衆夷不同、西屠以草染齒、染白作黒云」又同書木玄虚が海賦に「或汎濊悠々於黒齒之邦」とある成李註に「至東南有裸人国、黒齒之民」とのゝ此外日本に属て黒齒といふ〳〵、山海経、呂氏春秋、史記趙世家、漢書東夷傳、淮南子、魏志東夷傳、ことらみな濊の国の古書なれども、此書どもに黒齒とあれば本朝の上古齒を染て上輩に移ざりしゆゑ国史にえざる所なれば彼国より通商するみつけ下輩どもの黒齒をそめるを傳聞して日月の照せる所日本のみ黒齒あるとてあまねくことゝのゝしけるゝ

挟桑国考

この豊後国の伊波比洋の西南の海島を云嶋もつ黒齒之国といふ〳〵疑なく是也とて小串重威が豊後行築姫島考をも引りけるとどよく物のへば東夷傳いさゝか也外の君にも他の国にもあらべて黒齒之邦と海の賊にものへば一ふ島をいひ〳〵あるべからず、あらず女装の横道なれば深くたどらずして、さて上古に齒を染る一説なる知人一条あり、試よまらして識者の教を俟つ○古事記に應神天皇人皇十六代近淡海国越幸時木幡の村に到坐其道儛あり比布礼の意富美が娘、矢河枝比賣と云人、藤美嬢子を見玉へて家にと問せ給ふて其明日比布礼が家に入坐て御酒盞を矢河枝比賣に玉ふ時の御哥に長哥也「美知尓阿波志・袁登賣・宇斯呂傳波・百云能ちをざてろも・袁陀豆呂迦母・柳こ・波那美波志・齒ぐろ比比斯那須中畧麻用賀岐許許・加岐多礼」下畧・さて此「波那美波志比比斯那須」とのゝ言を本居大人が

古事記傳

巻三の四十二丁

に注して曰「波那美波志は齒並喙にて齒の並生たる喙とゝふことなり・比比斯那須は蓼如なり」中畧・さて此二句は次の一句を隔て和迩の序なり其序は先迩てゝ地名を鰐魚に取て此魚の齒の勝て利由なり中畧蓼は云く鋒の如く甚く尖りて刺突物なる故に齒の鋭に譬給へるなり中畧契沖此二句を齒並者如推らして斯は助辞なり齒

並のうつくしきを推をゝべなるが如しとあり。詩云。齒如瓠犀とも似たることあり。さて此孃子の齒のことしなるゝ非あり又師も類云師と真淵也同其意あて志比比ハ下の比ハ
濁りて美み通ひて推実なと云れたるもつ為し先是若此孃子の齒をゝめて
詔るゝゝべ眉画の次みをゝべなを此み在ているゝ也其故ハ先づ眉と齒とを云むみ
次第も眉ハ先よ齒ハ後みあるべくゝ又なとひ甚ゝ齒を先み紹ふも若然らば先ゝ
方みを序の詞ハゝべなとあるみ先ゝるゝハ序ゝてふとたゞ齒並はと紹ひゝて
久返りて後ゝる眉み長き序ハ初ゝ為ゝ
俄みゝるゝちぞまるなとひ上ハ一ツ御哥ゝんも齒ハ。ゝ俄ゝり且斯の助辞も
甚徳ゝるゝ也決て助辞を置ゝ処ゝ非ゝるを也」以上本居大人の説ゝり。扨もく本居
宣長大人ハ天下みゆるされる博達ゝ此大人の著書の為み御国学ひ給く
益を得ゝと翹壁を得て南夜を照ゝ如しゝ御の是百樹此大人を師とせゝ
を常み悔此ゆゝよ此大人の著述ハ我みゝるゝ絲ゝて續。其ゝる中ゝ件の

古事記傳ハ学力を竭されたる物ゝ一言半句とゝも金玉の署ゝ雖ゝ感
伏せゝらんや然ゝ我ゝ浅学の布鼓をゝして博達の雷門を過ん」其愚魯
けゝどゝの「齒並ハ蒂如」の説ゝ於て竊ゝ考もく応神天皇の件の御哥ハ
山城国宇治郡木幡村の御ゝ丸迹と云所の比布礼の意美とゝの人の女矢河枝
姫とゝの美人ゝ行遇ひ玉ひゝふりぶりゝ玉ふて名も住所ゝ問ひ玉ふて明日還幸の
時ハ汝ゝ家ゝ入御と紹ひて入御ゝ御あり。附御者ゝ奉りゝる鮮ゝよ美くゝるゝ
こゝみのうゝ。ゝとゝもきのへかゝとゝて姫よゆたゝひゝとゝものゝふゝく姫の
丽美を称ひゝ御哥ゝり。ゝてきのゝ姫ゝ天皇よゆきゝひゝる附のゝゝを古書ゝゝて
推量ゝるゝ白き衣赤き裳髮ハ垂髮べよも御ゝゝるゝ世ゝゝ赤き紙頬みゝりて
假粧ゝ　上古の粧ひハゝみゝゝゝ　の所ゝゝゝく　他行の附ゝゝゝ激須比　此事ゝゝゝ　とゝ物の
布ゝて作りゝる紙ゝゝて顔ハゝのゝゝて
とゝ紙先ゝ眉を後ゝ結ひゝる紙ゝみゝゝゝ如く大人不審ゝゝゝ

浅学なれども心をふるまひて物のひとるるみ天皇路まで姫よゆきあひ玉ひ姫がゆたるてひろまぎさのたなるうぬみ御目ぎまりてよびそめさせ玉ひ附ふうとうる激須比のまぎまよりこそ〜いけと歯並も美しくさて住家をど問ゑ玉ひ時ハ眉を濃く塗なるをもよく御らんじ侍ものいよく美人をもど入坐玉ひんぬかせもあり〜あるんさるうみきのみいらんじたるまみ次第して「みちよのは美女後姿柳腰かも・はぶみは歯並ひ〜か次・まよかきたる眉画濃画垂かきたれ」と弟一ようしろまぎ弟二よういけと身こまものづまも艶〜かりしゆ名今日うへ入坐てよくこれバらもくうう〜とその御哥をどバ歯を眉の先よもくハ不審とぞおもふ・さて又御哥ハ「波那美波斯比比斯那須」一ツの比を衍文とまるとさもあるべし・えみを歯並ちもちろんうり・ひあかすを契沖真淵両大人の説をいろ〜とせうるとて菱如とあるハ倫みけどど「菱ハ鋒の如く甚く尖りて刺突物故ま歯の説みたうへあるあり」とひひ其弟まも「九迩て地名を鰐魚ま取りて蕚の歯のまぎまて利由あり」といえれうハいえあうん此姫の歯菱の如く尖り鰐魚の歯のごくあれバらもう而美壌子とて天皇の御意みかもみべきかの路まてひきを洗らんじたる附うハ鬼娘をて逃さう玉ハんけまバ歯並ハ菱の尖りたるを賦せ玉ひうるまあらじ「波那美波斯比斯那須」ハ歯並ハ菱の如く光澤多りとて黒歯まるつやうある歯を菱ま準て称美玉ひうるまあらざう然却ひうハ此度神天皇の御世西土ハ西晋の始祖武帝ど世まて日本をさして黒歯とひうる件の誤籍どもハ此武帝ど時より以おの物まバ應神天皇の御世も黒歯まる風俗ハおのうんさまバ此矢河枝姫もたどろめまうんとぞおのハう是則「比斯那須」を黒歯ものんとまるの本拠ありさて山海経ハ巻九ふ黒歯ま夏の禹王ど作ま西土まて古くのひ侍さうハ信ざまれまづ禹王ど作とまるバ御国ハ鸕鷀草昔不合尊の御世ものこの此頃み作りうとのハ山海経を証とまるバ黒歯ハ神代よりの風俗ものべるまどさうまるとおのハ一証あり此度神天皇ま

御四代前景行天皇の御時熊曽・建とゐ二人王命みまらうはげるを王子ふ雄
命御父景行天皇の命みよりて御一人まかの二人を討み行せ給ふみ御歳十
六の時ありなまびのまゝ御ン髪ハ生ざりけん髪をゆゐみ
古事記見也 女子の服飾み易玉ふ事を 古事記 景行天皇の巻み後鏡とも乙女
のさまみゆひかへ玉ふ事みどまびゝ巨細ふ書ゝ有るど黒歯ゝ玉ふとゝ
依てあるふみ此時かの者を欺得て討玉ひ八かるゝ女をあのめく酒宴まる席へ
ゆきゝ給ひをゝ乙女とありひそ戯れなる洲の事あるを此比及の婦女ども
風俗ゝ必ずゝ必ずゝ古事記にあるべき筋ゝ書ゝ
事ハ古ふいひさる洲籍ゝ黒歯とのひ八今の如く天下翕然の風俗ゝ
ゝ・ゝ和名抄ゝ云ハ千年以上ゝ婦女の黒歯ゝ
殿蓬園婦女ゝ必歯を染ゝ
ゝ古き風ゝ・擂七八百年ゝ

○歴世女装考後編目録

○婦女の歯を染る由縁の考

○八百年前の中昔の比及歯くろめ比事 種く

○公卿の歯を染玉ふ由縁

○武士の歯を染ゝ風俗の来歴

○鐵漿を・か糸といひ・ゝ水とも・ゝき水ともいひゝ事

○中昔の比及ゝ女子六七歳の比よりそくろめ玉ふる事

○近古十三歳をかぬ初とする故実

○今の如く眉を拂ふゝ上古よりゝ凡儀ある事

○上古の画眉墨ゝ作る事・西土の

○和漢燕脂の起原

○中昔のゝ面脂と口脂と二種あゝ考

○上古の女ハ假粧の考
○今もいへどうく眉といへ名義の考・どうくの文字
○和漢のもゝ頬脂つけたる事・近昔のくべふ・赤子の額紅点事
○白ふとゝへ和訓の考・べふをおいろとゝへ由縁
○鉛粉ハ持統天皇の御時を始とまるハ非なる考証
○八百年前鉛粉の形ハ考証・はゝろんの古名・異名
○清少納言はゝろんを濃くつけし事
○西土の婦女はゝろんのつけやう
○天竺ハて釈迦如来の在世白ふはゝろんあり事
○西土ハて燕脂・鉛粉・膏澤の神の名
○爪ハ白ふをさせる事・西土ハて婦女指甲を紅く染る風俗
○上古の女衣服の事・手足の飾の事

○布・錦・絹・木綿織の始原
○呉服物とゝへ名義・小袖とゝへ名義
○振袖の起立の考・袖ル帳とゝへ事
○上古ハ於須比とゝへ女の被り物の事
○領巾・裙帯とゝへ女の身ハ飾る物の事
○上古より中昔の末までも女ハ下輩も常ハ赤裳を着なる事
○被衣・袿・かいぞう・つぶさう裙・あづまからげの事
○腰巻・湯巻の故実・ゆまき・ふさのとゝへ名義
○女の膝へうる赤鳥とゝへ物の事・赤まへぐれ古くあり事
○婦女衣服の文様古今の沿革の考
○今へへ・地赤・地黒・茶屋つゞ・本つゞの名義の考
○揔もやうハ文字入の考・中もやう・裾もやうの起立

○女帯古今の沿革・下げ帯・腰帯の起立
○醒齋翁ゲ・骨董集ヨリ出サルモノ・虫の垂絹の補遺
○女の雨衣着る始り・綿帽子・頭巾くぐの弁説
○中昔韈子を足袋ともいひ事・近古婦女の韈子
○古今婦女の笠の種類くさくの考証・今の日傘の起立
○婦女の履古今の変格・輿の代りヨ婦女人ヨ負フ古風

○婦人雑事之部

○古今婚禮の変格・産養の異同
○北の方・御新造・おかみさま・かあ・ゑの類・女の称呼くぐの名義
○むすめ・むすこ・せがれの名義・文通のしし・封皮ヨリ書考
○勤仕の女中ハ・老女・中老・ゆもつた・おさゑ・おまるひとのハ名目の考
○中昔宮女の合部屋・局の名義

○上古より近き昔までも女の他行ハ必袋を持ル事
○ゆもつハ位高き女も自衣服を縫裁ル事
○中昔宮女の淫弊・紫式部・清少納言ゲ事
○婦女の心ヨ覚ゆ〻て益ヨるべき事のくさぐ

▲右者後編の標目ゆの大方をまるを撿證の古図もゆのまるあり清書の時ゆ説の増補ヨりて標目を更條脚の前後まるも

あるめりまハたゞ心ヨなのみを考ルつ
ゆよりまゞ著述をなすヨ五ツの富を得ざれバ雄篇を出ざル一ハ学オヨ富
二ハ藏書ヨ富三ハ記憶ヨ富四ハ青年ヨ富五ハ閑静ヨ富此五ツの中ゆ
於て地の利たゞ一ツ少ルく閑静を得るのみ塩米を問ざるを以て此作あり・ゑと
より孤陋の著述管見の弁説なまゞ外謬最多ケるべル
玉人の玉を磨く随て磨バ随て光を出を著述の稿を換るハ玉人の玉伐

磨くが如くにまぶく稿をかへざれば全澤をるさぶ吾が此片瓦の作も稿一脱
ちくのち讀これば心ゆるざる所多くして続きて後編をも書終んふ心用く且
它ふ著述もあれば疎漏ハ後ふ補ひあんとて稿を換ま茲ふ前編の華を拭ふ

俗称　岩瀬涼仙　著

歴世女装考巻四　前編之部終

官許

弘化四年
丁未　仲秋

和漢洋書籍出版發賣
京都書林　三条通寺町東入北側　福井源次郎